

目次

はじめに	……………	吉原 浩人	1
書誌・文献目録	……………	吉原 浩人	2
凡例	……………	吉原 浩人	3
身延文庫蔵『江都督納言願文集』卷一	……………	七田麻美子	4
国立歴史民俗博物館蔵『江都督納言願文集』卷三	……………	鈴木 英之	36
国立歴史民俗博物館蔵『江都督納言願文集』卷六	……………	吉原 浩人	64

はじめに

本書は、二松学舎大学二十世紀COEプログラム「日本漢文学研究の世界的拠点の構築」の成果報告の一端を担うものである。吉原浩人は事業推進担当者として、鈴木英之は研究協力者として、同プログラム「上古・中古日本漢文学」班の中で、「大江匡房・永観の研究―文人と僧侶の院政期漢文学―」を主題に、同じく研究協力者である河野貴美子とともに共同研究を行っており、七田麻美子も『江都督納言願文集』の検討会に参加した。さらに、二松学舎大学大学院・早稲田大学大学院において、吉原が大江匡房作品を講読した際の受講生である、朱江・柳本真澄と七田が、入力業務を分担した。その間、COEプログラム調査の一環として、吉原・河野・鈴木・七田らは、国立歴史民俗博物館・身延文庫・叡山文庫・東大寺図書館・興福寺・薬師寺・高野山大学図書館・大谷大学図書館・龍谷大学図書館・上野学園日本音楽資料室などにおいて書誌調査を行い、京都や大宰府跡などで、大江匡房の足跡を確かめる実地踏査を行った。

『江都督納言願文集』は、院政期の文人、大江匡房（一〇四一―一一一一）の願文を集めたもので、全六巻として編輯されたが、第四巻は欠巻である。これまでの研究は、茨城県水戸市六地藏寺に蔵される、永享七年書写本を、平泉澄が一九二九年に活字翻刻した本文を中心に行われてきた。この影印は、一九八四年に汲古書院から刊行され、活字本の誤りを正すことができるようになった。しかし、六地藏寺の本文そのものの信頼性に問題があり、精確な読解に支障をきたす場合があった。これ以外には『続群書類従』に収載される巻三のみの残欠本が活字翻刻されている。

今回翻刻紹介するうちの身延文庫本は、巻一のみの零本で、山崎誠氏

によって一九八一年に学界に紹介された。しかし、かつて身延文庫は一般に公開されておらず、身延山における学会開催の折の展示で垣間見る以外、調査の機会を得ることができなかった。また、国立歴史民俗博物館蔵本は、巻三と巻六（後欠）の零本である。これは、故田中穰氏旧蔵で、旧重要美術品に指定されていたが、個人蔵ということで、閲覧は不可能であった。一九八八・一九八九年に、田中穰氏蔵本の一部が国立歴史民俗博物館に収蔵され、二〇〇〇・二〇〇〇五年に目録が刊行され、その全貌が明らかになった。しかしこれまで、両本とも本文の翻刻はなされていなかった。

吉原は、『江都督納言願文集』両古鈔本のうち、国立歴史民俗博物館本を、同館共同研究員の立場で、二〇〇六年九月に原本調査を行うことができた。また同身延文庫本については、渡辺麻里子氏の紹介により、二〇〇八年四月、七田とともに調査・撮影の機会を得た。両施設の関係者に、深謝申し上げる次第である。

ただ吉原は、本年度中国杭州市の浙江工商大学日本文化研究所客員教授として滞在おり、二松学舎大学大学院の集中講義や、夏冬の休みの折にしか共同作業ができなかった。本翻刻は、原本との再度の照合を経ておらず、三名の校訂者との読み合わせも充分でないなど、必ずしも完璧なものではない。両本とも、綴じ代部分を中心に本文の状態が悪く、未読部分がある。さらには我々担当者の力不足による誤読も、少なからず含まれている。にもかかわらず、ここに初めて両古鈔本の翻刻を公表する意義は、まことに大きなものがある。今後、本報告書の成果を基礎に、さらに精緻に検討する機会を得たい。現在、某出版社において、『大江匡房全集』の企画が進展しつつある。近い将来、本報告書の基礎に立ち、周到な校訂本文を作成して、江湖に提供することを目指したい。

二〇〇九年一月十九日

吉原 浩人